

訳注『風月小誌』第二号（下）

要 木 純 一

1 初春山 しよしゆんのやま 桜か本吉雄 さくらがもよしお

あしひきの 山 やま をや春 はる の 越ぬらむ こえ まだらになれる 峯 みね の白雪 ししらゆき

【大意】（初春の山の風景）足を引かずつてやつと登れるような、高く険しいあの山を春が越えてきたからだろうか。それで、真つ白におおつていた峯の雪がところどころとけてまだらになっているのか。まるで春の足跡みたいだ。

【注釈】初春山―正徹に同歌題（結題）あり。桜か本吉雄―山田吉雄。前出。山田美妙の父。一八八二―八七、鳥根県警察本署（部）長。あしひきの―山の枕詞であるが、足を引かずするような含意がある。越ぬらむ―「らむ」は原因を推量する気分。親盛「秋風は浪とともにや越えぬらんまだきすすしき末の松山」。春の擬人化。まだらに―業平「時知らぬ山は富士の嶺何時とてか鹿の子まだらに雪のふるらむ」。峯の白雪―源重之「吉野山峯の白雪いつ消えてけさは霞の立ちかはるらむ」。

2 里鶯 さとのかぐいす 高橋真全 たかはしまさあき 出雲松江人 いずもまつえあひと

うめ咲て なぐね 鳴音 なぐね も更 さら に か お をるなり こや うぐひし 鶯 いす の かさぬ い ひのさと

【大意】（里に下りてきた鶯）うめが咲いて、今まで以上に鶯の鳴く声が薫るかのごとくである。まさに、こここそが鶯の笠、すなわち梅の花を縫う笠縫の里なのであるうか。

【注釈】里鶯―為尹等に同歌題あり。高橋真全―まさたけ、か。出雲藩 文久二年八百首四八。かをるなり―聴覚と嗅覚の共通感覚。西行「橘の匂ふ梢にさみだれて山郭公こゑかをるなり」。こや―清輔「天の戸をおしあげがたに歌

ふなりこやうぐひすのあさくらのこゑ」。こやは、後に謡曲の決まり文句となる。難波「とにかくにも津の国の。こや都路の難波津に」。芭蕉も愛用「荻の声こや秋風の口うつし」。鶯の―鶯の笠を梅の花に見立てる。源常「鶯の笠にぬふといふ梅の花折りてかざさむ老いかくるやと」。小大進「梅が枝に柳の糸のかたよるははながさぬひにうぐひすやくる」。芭蕉「鶯の笠落したる椿かな」。かさぬひのさと―笠縫邑。崇神天皇六年に、宮中に奉祀していた天照大神を移し、豊鍬入姫命に託して祀らせた場所。比定地に諸説あり。黒人「四極山うち越え見れば笠縫の島漕ぎかくる棚無し小舟」。ここは、鶯の声に端を發した、単なる連想にすぎまい。

3 柳辨春 保々光良 石見津和野人

浅みどり 春くる色の 糸口を ひき出すものは やなき也けり

【大意】（柳に春を見つける）柳の浅緑色に春が来たのを感じる。その枝は、まさに浅緑の色糸で、あたかも空中から春の糸の端をひきだしているかのよう。

【注釈】柳辨春―正轍に同歌題あり。保々光良―石見国津和野士族 明治歌集二編下八 浅みどり―遍昭「浅緑糸よりかけて白露を玉にもぬける春の柳か」。春くる色―春来ると繰る糸を掛けている。色も浅黄色と春が来た気配の両意を兼ねる。為氏「道の辺の川沿ひ柳いとはやも春くる色に打ちなびきつつ」。定家「打ち靡き春来る風の色なれや日を経て染むる青柳の糸」。貞成親王「里ならぬけぶりの色も薄緑霞も靡く柳なりけり」。

4 春雨興 桃李園年長

貝おほひ さてや炗物 合せてむ 今日けふの春雨 やむへくもなし

【大意】（春雨の興趣）貝おほひの遊び、それから薰物をあてる遊びをしましょうか。今日の春雨はやみそうもなく、外には出られないから。春は雨もまた楽しい。

【注釈】春雨興―同歌題未見。桃李園年長―増田年長。既出。貝おほひ―貝合わせ。平安時代末期から行われている

貝殻を合わせる遊戯。三六〇個のハマグリの貝殻を左貝（出貝）と右貝（地貝）に分け、出貝に合う地貝を多く見つけ出した者を勝ちとする遊び。その道具は明治まで上流家庭の嫁入り道具となり、女子の遊びとして存続した。なお、本来の貝合わせは別の遊戯。西行「今ぞ知るふたみの浦のはまぐりを貝合わせとて覆うなりけり」。さてやー本来はそのまま、そうして、．．．だろわか意であるが、それとも語気のようにでもある。人麿「かくしつつさてややみなむ大荒木の浮田の森のしめならなくに」。炷物あはせてむー薫物合わせ。香合わせ。各人が秘密に調合した練香を持ち寄ってたき、判者が優劣を判定する平安時代の宮廷遊戯。元輔「移り香の薄くなりゆく薫物のくゆる思ひに消えぬべきかな」。和泉式部「夢ばかりあはせたきものなかりけりけふりとなりてのほりにしかば」。今日の春雨ー伏見院「のどかにもやがてなりゆくけしきかな昨日の日影今日の春雨」。やむへくもなしー永縁「冬深み難波の船は通はじな芦間の氷とくべくもなし」。

5 春駒

澄川正彌

石見津和野人

母子草

もゆる春野に

こゑ高く

いな、さわたる

雲雀毛の駒

【大意】（春の仔馬）ハハコグサが芽生える春の野原に、雲雀毛の仔馬が、いななき続け、高い声が響く

【注釈】春駒―藤原盛経に「春駒の心をよめる」の序あり。澄川正彌―後、津和野の郷土史家。『津和野教育沿革及び人物略傳』（昭和3年刊）、『島根県鹿足郡誌』、『楽山詩鈔』、『津和野の和算家』。母子草―キク科の花。春の七草の一つ。別名ゴギョウ。和泉式部「花のさと心もしらず春の野にはふはふつめるははこもちひぞ」。夫木和歌集に母子草と題する。もゆる春野に―良平「石上古野の小野の雨のうちに濡れても萌ゆる春の若草」。こゑ高く―躬恒「我が宿の秋萩の花咲くとさぞ尾のへに鹿の声高くなく」。雲雀毛―馬の毛色の名。黄と白とのまだらで、たてがみと尾と背の中央部とが黒いもの。雲雀鹿毛（ひばりかげ）。名馬が多いといわれる。小侍従「見渡せばまだ草絶えぬ春の野に思ひあがるや雲雀毛の駒」。

6花はな 小谷古蔭おたにふるかげ 伯耆会見郡人ほうぎえみぐんのひと
 くぬき原くぬきはら 春とも見えぬはるともみえぬ 木の問よりきのまより まはらに匂ふまはらにはわう 山桜かなやまざくら

【大意】(花)クヌギが青々と広がる野原、ちつとも春という感じがしないが、その枝の間から、ところどころ山桜の花々が桃色に照り輝いている。

【注釈】小谷古蔭—一八二一—一八八二。幕末—明治時代の国学者、神職。加納諸平らに歌学をまなぶ。万延元年鳥取藩国学方手伝となり、文久三年国学家業に出仕。音楽にもひいで、皇学寮音楽講師などもつとめた。明治四年宇倍神社欄干となった。因幡出身。通称は忠次郎、為之丞、鞆負、融。号は杉双、杉園。名は「ひさかげ」ともよむ(講談社日本人名大辞典)。くぬき原—家良「高瀬さす佐保の河原のくぬき原色づくみれば秋の暮れかも」。光俊「春さてもはやまがすそのくぬき原まだ冬枯れの色ぞ残れる」。春とも見えぬ—六百番歌合「天野原春とも見えぬながめかな去年の名残の雪の曙」。木の問より—古今集「木の問より漏り来る月の影見れば心づくしの秋は来にけり」。一条君「木の問よりちりくる花を梓弓えやはとどめぬ春の形見に」。匂ふ山桜かな—宣長「敷島の大和心を人問はば朝日に匂ふ山桜花」。

7新樹しんじゆ 千家尊賀せんげたかよし 出雲杵築人いずもきずきのひと
 芳野山よしのみやま きのふの花きののはなの すえ見すえみ 見ればみれば 嵐あらしの上のうへに みつえみつえ さすさす なり

【大意】(新緑の木々)吉野山で、昨日まで咲いていたが今は散ってまった桜の花の梢をみると、ふもとで嵐が吹く山の上の方で、みずみずしい新芽が出てきている。

【注釈】新樹—新後拾遺和歌集「元弘三年、立后の屏風に、新樹を 藤原為冬朝臣」。千家尊賀—皇学者・歌人。通称亀麿、号は梅之舎四世。尊澄の次男。出雲生。千家尊澄に師事。明治39年(1906)歿。芳野山—吉野は、芳野の表記の方が多かった。言わずと知れた桜の名所であるが、南朝根拠地として、尊王攘夷派の聖地であり、日本の皇統、維新後の新国家を象徴しているのかもしれない。きのふの花の—小大進「いかにして思ひすてまし朝顔のきのふの花のありがたきよを」。正徹「契りしは昨日の花の山あらしわすれがたみの雲もかからで」。すえ見れば—西行「秋過ぎて庭

のよもぎのすゑみれば月も昔になる心地する」。嵐の上に―嵐の吹く上の方。定家「うちもねず嵐のうへの旅枕都の夢にわくる心は」。みつえさすなり―瑞枝。みずみずしい若い枝。万葉集「滝の上の三船の山にみづえさししじに生ひたるとがの木いや継ぎ継ぎに」。「さす」は、草木の枝などが伸びる。恋の復活を暗示するか。西南戦争、自由民権運動等の世の混乱が収まりつつあることに意を致しているのか。

8 湖辺郭公こへみほととぎす 賞嶽舍久敬しょうがくしやくひさたか 平井氏ひらいし 出雲松江人いずもまつえのひと

一声はひとしゑい 矢走の沖やばせのおき なきすて、行へゆくえや志賀の山やまほととぎす

【大意】（湖畔のほととぎす） 声ないて、琵琶湖のやばせの沖をあとして、志賀の山へ、行方も知らず消えていくほととぎすよ。

【注釈】湖辺郭公―頓阿に同題あり。「にほの海にこぎ出でてきけば時鳥山もととほく今ぞなくなる」。湖は琵琶湖。平井久敬―不詳。一声は―頼政「ひとこゑはさやかに鳴きてほととぎす雲路はるかに遠ざかるなり」。矢走―矢橋。琵琶湖西岸。現草津市。航路で大津につながり、港町として栄えた。近江八景の「矢橋帰帆」で著名。万葉集「近江のや八橋の篠を矢はがずてまことあり得むや恋しきものを」、兼昌「にほてるややばせのわたりする舟を幾たび見つつ瀬田の橋守」。なきすて、―千五百番歌合「等閑にやまほととぎすなきすてわれしもとまる森の下蔭」。宗尊親王「一声をあかずも月になきすててあまのとわたるほととぎすかな」。志賀―琵琶湖南西岸、現在の津市一帯の古称。人麿「ささなみの志賀の唐崎幸くあれど大宮人の船待ちかかねつ」。志賀の山越は現大津市から京都市左京区北白川へ通じる山道。後拾遺「桜花道見えぬまで散りにけりいかかはすすき志賀の山越」。(行方を) 知らず、を掛ける。山ほととぎす―人麿「我が宿の池の藤波咲きにけり山郭公いつかきなかむ」。

9 五月雨晴さみだれはる 神樹園永雅かみきぞのながまさ 森氏全所人もりしじょうしよのひと

日ひをふりし 五月さつきの雨あめの果はてみえて 星ほしの影かげすむ にはたつみ哉ずかな

【大意】（梅雨晴れ）長い日にち降り続いた五月雨もやっと終わりそうな気配。庭の水たまりに清んだ星の影が映っている。

【注釈】五月雨晴—頓阿に同歌題あり。梅雨晴れの語と同様、もとは梅雨の晴れ間の意であつたが、梅雨が終わつて晴れることを指すようになった。森永雅—出雲の人。称左馬之丞。号神樹園。為泰の子。神樹園歌集一卷。出雲国皇学者歌人学系略初編。日をふりし—日を降る（二日中降る）と日を経（長い時間を経過する）の掛詞。小町「花の色は移りにけりないたづらにわが身世にふるながめせしまに」。肥後「思ひやれとはで日をふる五月雨のひとり宿守る袖の滴を」。五月の雨の—越前「うち湿り花橘ぞ薫るなる五月の雨の夕暮れの空」。果みえて—仲実「思ひかねつれなき人のはてみむとあはれ命の惜しくもあるかな」。星の影すむ—玉葉集「星の影もそなたは薄き東雲に山の端見えて雲ぞわかるる」。基俊「見てのちはいとど心ぞ増鏡かげすむひとになりやしなまし」。清むに住むを掛けたか。にはたつみつ、づの清濁両用。行潦。水たまり。万葉「はなはだも降らぬ雨ゆゑ庭立水（にはたつみ）いたくな行きそ人の知るべく」。宗尊親王「待つ人もとはで古屋は五月雨のながめにまさるにはたつみかな」。

10 御被みそぎ 中村久之なかむらひさゆき 仝所人どうしよのひと

みそぎ川がは 流ながれて早はやき 幣見ぬさみれは 夏なつの行ゆくへも よとまさりけり

【大意】（夏のお祓い）初夏の御祓川、みそぎをしたあとと幣が目の前をさつと流れていく。これから、天氣が不順になることなく夏に向かつていくことを予言するかのよう。

【注釈】御被—身に罪または穢れがあるとき、また、重要な神事などの前に、川原などで、水で身を洗い清め穢れを落とすこと。中古には、年中行事のうち、特に六月晦日に行なわれる「夏越の禊」と強く結びつき、和歌にもよく詠まれている。源有政「六月祓の心を 御祓する河せにたてるいくひさへすがぬきかけてみゆるけふかな」。中村久之—不詳。出雲松江の歌人に中村久慶あり。みそぎ川—一般にみそぎをする川のことであるが、近世ではみそぎ川を指す。鴨川から分流し、京都市内の鴨川右岸（西側）高水敷を鴨川に平行して流れる全長約二・五キロの人工の水路。源氏・

東屋「みそき川瀬々にいださん撫で物を身に添ふかけとたれか頼まん」。幣―神に祈る時にささげる供え物。麻・木綿（ゆう）・紙などで作った。よとまさりけり―淀むは、流れがとどこおり水がたまること。万葉「松浦川七瀬の淀は淀むともわれは淀まず君を待たむ」。文保百首「行く水も淀まざりけり柵に岸の山吹影を隠れて」。

11 萩 はぎ 柳の舎能敬 やなぎ やよしたか 岸氏全所人 きししどうしよのひと

促織の こほろぎ 声をしるへに 来て見れば 野への のべ 絲萩 いとばぎ はな咲にけり

【大意】（萩）秋らしい景色が見たくて、コオロギの鳴き声が聞こえる方をめあてにして来てみると、野原に糸の様に枝の伸びた萩の花が咲いているのをみつけた。

【注釈】岸能敬―不詳。促織―謝朓・秋夜「秋夜促織鳴く」。古く、秋鳴く虫の総称。万葉集「夕月夜心もしのに白露の置くこの庭に蟋蟀（こほろぎ）鳴くも」。万葉集では「蟋・蟋蟀」を旧訓ではキリギリスと訓んだが、字余りになるので賀茂真淵以後コホロギと訓む。平安の八代集ではすべて「きりぎりす」で、「こほろぎ」は見えない。声をしるへに―忠見「鶯の声をしるべに泣き暮らし知らぬ山辺に宿りをやせむ」。来て見れば―古今集「鶯のなく野辺ごとに来て見ればうつろふ花に風ぞふきける」。野辺の絲萩―絲萩は、糸のように枝の細い萩。大進「いとほぎの葉分の露の数々によるとも見えずてらす月影」。人麿「秋風は日ごとに吹きぬ高松の野辺の秋萩散らまく惜しみ」。はな咲にけり―敏行「秋萩の花さきにけり高砂のをのへの鹿は今やなくらむ」。

12 秋風 あきかぜ 小田つな子 おだ つなこ 出雲 いずも 嶋根郡人 しまねぐんの人

軒近き のちか 萩かりすて、秋風を あきかぜ きかしとおもへは えは 松に吹なり まつ ぶく

【大意】（秋風）軒のそばの萩をかりすて、悲しい気持ちになる秋風を聞くまいとしたが、今度は松の方で風の音が高くなる。あなたに飽きられたらと思つてあなたへの恋心をすてたつもりだったが、それでもあなたを待ち続ける。

【注釈】小田つな子―小田綱子 松江藩士御側役小田才一兵衛妻 為泰門 出雲国皇学者歌人学系略 初篇。嶋根郡―

この時期の区分では、松江市を含めて大橋川の北側、島根半島全体にわたるが、松江といっていないところから、川津、法吉等の近郊をいうか。軒近き―西行「軒近き花橘に袖しめて昔をしのお涙つつまん」。萩―恋愛感情の象徴として詠まれることが多い。旅人「我が岡にさを鹿来鳴く秋萩の花妻問ひに来鳴くさを鹿」。萩は古来秋の代表的な花。かりすて、―西行「常盤山椎の下柴刈り捨てむ隠れて思ふかひのなきかと」。秋風―秋は飽きの掛詞。きかしとおもへは―清輔「幾年ぞ聞かじと思へばほととぎすまつにつけても老いぞ悲しき」。為家「よそにだに聞かじと思ふ故郷の垣はの萩に秋風ぞ吹く」。松に吹くなり―松と待つを掛けているであろう。如願「さらぬだに秋の旅寝は悲しきに松に吹くなり」とこの山風」。

13 浦鶴鳴うらつるなぐ 楠の舎巖くす やいゝおの 野間氏のまし 出雲松江人いずもまつえのみと

波の音はなな おと 更ゆく月にふけ つき しつまりてしづまりて なく声高しなく せいたか 和歌の浦つるわかの うち

【大意】（和歌の浦で鳴く鶴）更け行く夜、月の照る中、波の音はしずかになった。かわりに、和歌の浦にふさわしい、鶴の高い鳴き声が響き渡っている。

【注釈】浦鶴鳴―慈円「浦鶴鳴月 たれかきく月のでしほの和歌のうらにあしべつゆけきたづのもろ声」。赤人「若の浦に潮満ち来れば潟をなみ葦辺をさして鶴鳴き渡る」以来の歌材。野間巖―称一玄 喜兵衛 島根県 森為泰門 直信 流柔道達人 出雲国皇学者歌人学系略 初篇。浪の音は―頼政「和歌の浦にたちのぼるなる波の音はこさるるみにもうれしとぞ聞く」。なく声たかし―定嗣「うばたまの夜さりくれば小牡鹿の鳴く声高し妻恋ひかねて」。和歌の浦つる―正徹「通ひ来よ古き都の雲るをば今も忘れじ和歌の浦鶴」。和歌の浦は、和歌山市和歌浦湾をとり巻く景勝地。

14 月前菊げつぜんのかきく 檀の舎栄雄かし やひでお 武熊氏たけくまし 全所人どうしよのみと

月照れるつきあて そらには星もほし まれなるをま 庭にかすそふにはひ 白菊の花しろきくのはな

【大意】（月の手前に咲く菊）月が照っている空には、その光におされて星がちらほら見えるだけだが、そのかわりに地

上の庭では白菊の花がたくさん星のように輝いている。

【注釈】 月前菊―鎌倉右大臣「月前菊といへる心をよみ侍りける 濡れて折る袖の月かけ更けにけり籬の菊の花の上の露」。西行「月前菊 ませなくはなにをしるしに思はまし月にまがよふ白菊の花」。菊を月光になぞらえるのが普通。武熊栄雄―不明。月照れるそらには星もまれなるを―曹操短歌行「月明星稀」(蘇軾・赤壁賦にも引く)を意識するであろう。和歌で星を菊にたとえるのは奇抜。かすそ―数が増す。数が多くなる。源氏物語・紅葉賀「御年のかずそふしるしなめりかし」。教長「春雨のふりしむままに青柳の糸に貫く玉ぞ数添ふ」。白菊の花―躬恒「心あてに折らばや折らむ初霜の置き惑わせる白菊の花」。

15 暮秋虫 小笹重春 仝所人

手枕の 下に音をなく きりくす 更行秋の 夜のはあはれさ

【大意】 (晩秋の虫) あなたの手枕の下の方でキリギリスが鳴いている。秋の夜が更け行くのに心動かされることだ。

【注釈】 暮秋虫―権僧正覚円に「暮秋虫を読み侍りける」の序あり。小笹重春―小笹良恭本人か縁者か。良恭は松江藩医。松江市末次町住 文化の人 出雲国皇学者歌人学系略 初篇 堂沢良澄門人。手枕の下に音をなく―為定「きりぎりすよをへて秋は手枕の下やすからぬねをやなくらん」。きりくす―虫の名。今のおおろぎ。良経「きりぎりす鳴くや霜夜のさむしろに衣片敷きひとりかも寝む」。更行秋―相模「人知れず心ながらやしぐるらむ更け行く秋の夜半の寝覚めに」。夜のはあはれさ―慈円「山里の暁方の鹿の音は夜半のははれの限りなりけり」。

16 初冬時雨 亀井重世 出雲広瀬人

昨日たに ふりし時雨の 雲ながら 冬立空に などまよふらむ

【大意】 (初冬の時雨) 秋の最後の一日の昨日ですらもう時雨が降った。その時雨を降らせた雲全体が、今日立冬をむかえた空をあてどもなくさまよっている。その雲のようにあなたは私のもとを去って行く。わたしはうわのそら、なぜむ

なしく今も恋に迷うのか、自問する。

【注釈】初冬時雨―後嵯峨院「百首歌めされしついでに、初冬時雨」の序あり。 亀井重世―不明。 昨日だに―家隆「昨日だに訪はんと思ひし津の国の生田の森に秋は来にけり」。 ふりし時雨の―市原王「時待ちてふりし時雨の雨止みぬ明けむ朝か山のもみたむ」。 雲なから―玉葉集「山の端を叢雲ながら出でにけり時雨に混じる秋の月影」。 冬立―立冬と発つを掛ける。 空に―心も空に（うわのそらに）を掛ける。 致平親王「思ひやる心もそらに白雲の出で立つ方を知らせやはせぬ」。 正徹「今日よりは冬立つ空と思ふにも暮れやすき日の惜しき老いかな」。

17 川落葉 桜園中造 羽野氏 石見津和野人

水の音は こほりに絶し 川面を 風に流れて ゆく木の葉かな

【大意】（川に落ちた葉）氷が張って水の音も聞こえなくなった川の表面を、風に流されるように木の葉がすべっていく。
【注釈】川落葉―頓阿に同歌題あり。 羽野中造―不明。 水の音は―公任「滝の音は絶えて久しくなりぬれど名こそ流れてなほ聞こえけれ」。 西行「水の音は寂しき庵の友なれや峰の嵐の絶え間絶え間に」。 こほりに絶し―玉葉集「只だ一重上はこほれる川の面に濡れぬ木の葉ぞ風に流るる」。 良経「難波濁入り江の芦は霜枯れてこほりに絶ゆる舟の通路」。 川面―もと川辺の意だが、中世以後、川の水の表面を指す。 かわも。 夫木和歌集「人ならば親の思ひこそあさもよひ紀の川面の妹と背の山」。

18 網代 入江清雄 出雲嶋根郡人

あしろ守 袖いかならむ 篝火の 影さへさゆる 宇治の川つら

【大意】（網代）冬の夜中、網代の番人のそではどんな風にぬれていることか。 かがり火の光までも冴え渡ってうつつている冷え冷えとした宇治川の水面で。 あなたを待ちくたびれて、寒々とした部屋でまんじりともせず涙で袖を濡らしている私のことを思いやつてほしい。

【注釈】網代―川の瀬に設ける魚とりの設備。数百の杭を網を引く形に打ち並べたもの。冬、京都の宇治川で、氷魚（ひお）を捕えるのに用いたので、古来有名。王朝貴族にとつては、宇治の冬の風物詩であり、遊覧や初瀬詣での行き帰りの見物であった。拾遺集「数ならぬ身をうぢ河のあしろ木に多くの日をも過ぐしつる哉」のように、男の夜の通いがとだえるのを嘆く女の歌に詠みこまれることが多い。入江清雄―神職、明治五年出雲松江玖夜（国屋 神社社家に生まる。神道事務支局長を経て美保神社欄宜となる。従八位、明治二十三年皇典講究所大拡張会議に島根県代表として出席。神道人名辞典。あしろ守―夜、かがり火を焚いて網代の番をする人。為家「網代守さぞ寒からし衣手のたなかみ川もこほる霜夜に」。袖いかならむ―家隆「故郷に別れし袖もいかならむ知らぬ旅寝の秋の夕露」。宇治―憂しを掛け。川つら―前注参照。伊勢「水底に映る桜の影みればこの川面ぞたちうかりける」。

19 霰 あられ 岡本松山 おかもとまつやま 出雲松江人 いずもまつえあひと

おと高く たか ふる屋の軒 やのき のいた庇 ひさじ さしも寒 さむ けき 初 はつ あられかな

【大意】（あられ）音を高くあげて、古い家に降るあられ。その軒の板ひさし、さしも（そんなに）寒い感じがつのるこの初霰。

【注釈】岡本松山―不明。号ならば、しょうざんと読むべきか。おと高く―赤人「吹く風の音高くのみ聞こゆるは置く露うたて寒くもあるかな」。ふる屋の軒のいた庇―風雅集「涙のみふるやのきの板庇漏り来る月ぞ袖に曇れる」。さしも―さはそのように。しもは強調の副助詞。上三句が序詞となつて、さしを導き出した。正徹「まだ宵の月の屋妻をやり出で車のひさしさしも契らで」。実方「かくとだにえやはいぶきのさしも草さしも知らじな燃ゆる思ひを」。寒けき―拾遺集「あしひきの山下風も寒けきに今宵も又やわが独り寝ん」。初あられかな―他阿「軒にさく木の葉の音に音そへて雲よりもふる初あられかな」。初霰は中世以後の語。

20 初雪はつゆき 竹の舎真純たけのやまますみ 長谷川氏全所人はせがわしどうしよのひと

朝あさまたき めせといふなる 大原女おほらめがか 妻木つまぎに雪ゆきを 見初みはつつる哉かな

【大意】(初雪) あさ早く、妻木(焚き付けの木) はいらんかね(買いなされ) という大原女の売り声が聞こえる。その妻木に、今年初めての雪が積もっているのを見たことよ。この女を妻にしたいという恋心が燃え始めるようだ。

【注釈】初雪―その年の冬初めて降る雪。万葉集「波都由伎(ハツユキ)は千重に降りしけ恋しくの多かる我れは見つしのはむ」。新年になって初めて降る雪の意もあるが、そうではない。長谷川真純―不明。同時期の歌人、大社神官に長谷川龍衛がいる(『出雲名勝摘要』)。千家尊福が大教正であったとき、訓導をつとめた。朝まだき―朝、まだ夜が明けきらない時。早朝。元良親王「あさまだきおきてぞ見つる梅の花夜のまの風の後めたさに」。めす―身体に接触させる傾向の動詞である「食う」「飲む」「着る」「履く」「買う」「乗る」などの尊敬語。蓮月尼・海人の刈藻・歳暮雪「めせめせと炭うる翁こゑかれて袖に雪ちるとしのくれがた」。いふなる―なるは伝聞の助動詞連体形。業平「さくら花ちりかひくもれおいらくのこむといふなる道まがふがに」。ここは、いうのが聞こえたというニュアンスであろう。大原女―京都北郊の大原や八瀬から、黒木や炭などを頭にのせ、京都の町へ売りに来る女。もめんがすりに手甲脚絆の独特な風俗が有名。おおはらめ。江戸より盛んになり、明治まで続く。村田春海「大原女の黒木おひたるが花の枝をりそへたるかた 春はまたやつるる袖もをる花にははすやたが妻木なるらん」。熊谷直好「大原女 紅葉をつまぎにさして大原の秋を都の市にこそうれ」。妻木―爪木。爪先で折りとつた木の意。また一説に、木の端(つま)の意という。薪にするための小枝。たきぎ。柴。万葉集「磯の上に爪木折り焚き汝がためとわが潜き来し沖つ白玉」。業平「すみわびぬ今は限りと山里につまきこるべき宿求めてむ」。雪を―行きを掛けるか。みそめつる―みそむは初めてあう(見る)の意。みるが男女の情交を指すことから、ひとめぼれの意にも広がる。拾遺集「夢よりぞ恋しき人を見そめつる今はあはする人もあらなん」。木下幸文亮々遺稿・見恋「音にのみききししらかはしらずしてあらましものを見初めつるかな」。

21 寒夜衾

別火千秋 出雲杵築人

かさねても 衾おもと 思はぬは 身より心の 寒きなりけり

【大意】(寒い夜布団にくるまって)いくら重ねても布団が重いと感じないのは、体というよりも心が寒いからなんだらう。恋に破れた独り寝の寂しさ。

【注釈】寒夜衾—正徹に同歌題あり。別火千秋—既出。衾おもし—衾は掛布団。和漢朗詠集・以言「春娃眠り足りて駕衾重し」。身より心の寒きなりけり—土左「身にさむくあらぬものからわびしきは人の心の嵐なりけり」。

22 炭竈

赤木真澄 出雲松江人

燠まさる 炭のけふりに 山里の としのさむさも 躰れにけり

【大意】(炭がま)炭がまで燠がどんどん燃えて煙がたっている。その煙に山里の年末の寒さが象徴されているかのよう。澄—松江 自由党関係者。燠—おきび。製炭は檜の木などを高温で不完全燃焼させて、高濃度の炭素を得る。出来上が

がったばかりの時は、赤々と静かに燃えているように見える。これに燠という。「おき」は名詞だが、あたかも動詞「おく」があるかのように認識しているか。まさる—増さる。だんだんと増加する。程度・度合いがはなはだしくなる。万葉集「旅にして物思ふ時にほととぎすもとな鳴きそ吾が恋まさる」。相摸「都にも初雪降れば小野山のまきのすみ

がまたさまさるらん」。燠まさるといふ異様な措辞は、元輔「高砂の松にすむつる冬くればをへの霜やおきまさるらん」等の置きまさらからの連想か。けふりに—炭を作る時は、加熱用のまきの煙や製炭過程で出る水蒸気や不純物が多量に排出される。正徹「小野山のすみの煙も吹きとくす嵐や空にこほりはつらん」。としのさむさも—冬のこと。歳寒の訓読。論語・子罕「歳寒うして、然る後に松柏の後れて凋むを知るなり」。為家「山吹の花の籬の春の霜歳の寒さもいかでいはいまし」。政治経済の不振を暗示しているのかもしれない。苦難の時こそ、燠のように反抗精神がじわじわと燃え上がる。あらはる—見えないものが表面に出る。徒然草「かかる折にぞ、人の心もあらはれぬべき」。古今集

「池にすむ名ををし鳥の水を浅み隠るとすれどあらはれにけり」。

23名立恋なになたつこい

楨祥舍和男ていしょうしやわなずお

泪川なみながわ 袖のしからみ くさもれて 流れやすきは うき名也ななりけり

【大意】（浮名が流れてしまった恋）泪川という憂鬱な名前を持つ川、そのわきにあるしがらみを浮き草が抜けていつて流れている。そのように涙で袖を濡らした筈句、漏れ流れた、私の悲しい浮名はやすやすと世に広がってしまった。

【注釈】名立恋―俊忠に「名立恋といふころをよみ侍りける」の序あり。楨祥舍和男―既出。木村和男。泪川―涙が多く流れることを、川にたとえた語。班子女王歌合「人知れずしたに流るるなみだがはせきとどめなむ影やみゆると」。また、伊勢の国の地名で、歌枕。袖のしがらみ―水の勢いを弱めるため、川の中に杭を打ち並べ、柴や竹などをからみつけたもの。引伸して、まとわりついて、引き止めるもの。関係を絶ちがたいもの。貫之「涙河落つる水上速ければ塞きぞかねつる袖のしがらみ」。うき名―浮名。憂き名を掛ける。仲綱「恋ひ死なば涙の川は絶えぬとも浮名のみこそなほも流れぬ」。二条「人古す里を厭ひて来しかども奈良の都もうきななりけり」。続後撰集「もの思ふ袖に砕くる瀧つ瀬の淀まで漏るはうきななりけり」。泪川それ自身が、憂鬱な名前でもある、ということも掛けているか。

24寄風恋あらしによするこい

松岡千年まつおかちとせ

出雲意宇郡人いずもおうぐんのひと

こぬ人を まつの板戸の 徒いたどに おとなふ物は あらしなりけり

【大意】（嵐にかこつけて恋を詠む）来ない人を家で待つ。そのまつじやないが、松材の板戸のように、意味もなく尋ねに来るのは嵐ばかり。私の心も荒れ果てる。

【注釈】寄風恋―後鳥羽院「寄風恋 わすれてはねぬべきものをなにと又誰まつかぜのあらし吹くらむ」。松岡千年―国会図書館に『祝詞集』所蔵。松岡千年著、住所出雲郷（あだかい）村、出版年明十三年四月。こぬ人を―定家「来ぬ人をまつほの浦の夕なぎに焼くや藻塩の身もこがれつつ」。まつまつの板戸の―歌語としては、まきの板戸。万葉集「奥

山の真木の板戸をとどと押し、我が開かむに入り来て寝さね。徒に―小町「花の色はうつりにけりないたづらにわか身世にふるなめせしまに」。おとなふ物は―金葉集「あきはててとふ人もなき山里におとなふ物は時雨なりけり」。あらしなりけり―土左「身にさむくあらぬものからわびしきは人の心の嵐なりけり」。

25 寄烟恋 けぶりにあはするこい
岩本松蔭 いわもとまつかげ 出雲松江人 いずもまつえのひと

あらはれて 空に煙は 立にけり 恋のなげきは 下もえにして

【大意】（煙にかこつけて恋を詠む）空に煙が立って、人目にもあらわになっている。そのように報われぬ私の恋は世間に無駄に知れ渡った。噂の煙の下では、恋の嘆きに生木を焚くようにくすぶり悶える私。

【注釈】 寄烟恋―隆信に同歌題あり。岩本松蔭―不明。あらはれて―隠していたものがあらわになる。小式部内侍「あらはれて恨みやせまし隠れ沼の汀によせし浪のこころを」。空に―そらに（うつろな気持、むなしく、根拠のない推断）をかけるであろう。源氏物語・帚木「それしかあらじと、そらにいかかは推し量り思ひくたさむ」。立にけり―煙と噂。壬生忠見「こひすてふわが名はまだき立ちにけり人知れずこそ思ひそめしか」。恋のなげきは―治承三十六人歌合「包めども恋の嘆きに時雨して我が言の葉ぞ色に出でぬる」。きは木を掛ける。下もえにして―燃えあがらず、下でくすぶること。歌などでは、心の中で人知れず思いこがれることにたとえる。古今集「夏なれば宿にふすぶる蚊遣火の何時まで我が身したもえをせむ」。おそらく、周防内侍「恋ひわびてながむる空の浮雲や我がしたもえの煙なるらむ」の本歌取りであろう。

26 友 とも
朱桜岡守手 はしかおもりて

魂あへる やまと心の 人もかな ともになかめむ 山さくら花

【大意】（友）魂と魂がピッタリ合うような、日本精神をもっている友が欲しい。一緒に本居宣長のように山桜花をながめようじゃないか。宣長も詠んだ山桜の精神をその友達に見出したい。

【注釈】朱桜岡守手―中村守手。既出。魂あへる―心が通じ合う。魂が結ばれる。万葉集「たまあはば君来ますやと我が嘆く八尺の嘆き」。やまと心の―本来は、大和魂と同じく、物事を処理する能力、処世知。漢才に対する語。大鏡・道隆「やまとごころかしこくおはする人にて」。国学で、漢意と対比して、「日本古来から伝統的に伝わる固有の精神」という觀念が付与されていった。「敷島の大和心を人間はば朝日に匂ふ山桜花」(本居宣長)。人もかな―躬恒「我が如く我を思はむ人もがなさてもやうきとよを試みむ」。ともになかめむ山さくら花―山家集・としたか「自ずから来る人あらばもろともにながめまほしき山ざくらかな」。友を掛ける。

27 詠史

富永楯津 出雲杵築人

ありときく 神の御国の かしこさに 船腹ほさず 貢き初む

【大意】(歴史を詠む)新羅王は神のしろしめす国が海のかなたにあると聞き、そのありがたさに、船腹がかわくことなく、貢物を始めたのであった。

【注釈】詠史―詠史詩は後漢の班固に始まるという。日本でも、和漢朗詠集に詠史の項あり。いわゆる神功皇后の三韓征伐を詠む。皇后の軍に屈服した新羅王が、毎年船を派遣して、朝貢することを誓った。明治八年の江華島事件、翌年の日朝修好条規締結等を受けた、日朝關係を意識するか。富永楯津―出雲の人。類題新年歌作例集八 大八洲歌集二十。ありときく―後撰集「有りと聞く音羽の山の郭公何か来るらん鳴く声はして」。神の御国の―慈円「日の本はかみのみくにととききしよりいませが如く頼むとをしれ」。船腹ほさず―船体の中央付近の舷側部。古事記の新羅王屈服後の誓い「今よ後、おほきみの命のまにまに、みまかひととして、年の毎はに船なめて、船腹乾さず、楫乾さず、天地のむた、しぞきなく仕へまつらむ」。貢―みつぎもの。もとはみつぎ。租庸調などの租税の総称。調(つき)を敬つていう語。ここでは新羅が臣下として馬を日本に上納すること。幕末、加納諸平・柿園詠草「墨 たくぶすましらぎの墨の舟かたも棹かぢほさぬ貢なりけん」。日本が朝鮮を清国から奪つて支配下に置くべきだという議論は、幕末以来あったらしい。

28 丹後国琴引の濱にて 松竹園忠成 大江氏 出雲松江人

打よする 波のつゝ、みも 松風の しらへにかよふ 琴引のはま

【大意】（丹後の琴引浜で）打ち寄せる波の音はあたかも鼓のようで、浜の松風が琴の弾くメロディーのようなのに調和している。琴引の浜の一大音楽空間。

【注釈】丹後国琴引の濱にて—現京都府京丹後市琴引浜海水浴場。鳴き砂の浜として有名な白砂青松の景勝地。琴引は鳴き砂を踏んだ時の音によるか。太鼓のような音を発する場所があつて太鼓浜と呼ばれる（この歌でも、おそらく意識しているであろう）。歌枕名寄・未勘国上「琴引山 六帖 いづくにかしらべのこゑの絶えぬらんこと引山の音のきこえぬ 今案、丹後国琴引浜、又源重之が日向国琴引の松ある絵をよめる歌、しら波のよりくる糸ををにすげて風にしらぶることひきの松、云云、山何国哉」とあり、古来の歌枕とは言えないらしい。丹後国の琴引浜は、近世より著名になり、歌にも詠まれるようになった。大江忠成—不明。鎌倉時代の武将と同姓同名。打よする—貫之「河風の涼しくもあるかうちよする浪とともにや秋は立つらむ」。後撰集「打ちよする浪の花こそさきにけれちよ松風や春になるらん」。つゝ、み—中空の胴の両端に皮を張って打ち鳴らす楽器の総称。中世以降は特に、中央がくびれた胴の両端に皮を張った打楽器をいう。しらへにかよふ—調べは音律。かよふは通じる、似合っている。永久百首「松風の吹くに通いて琴の音は秋の調べの身にもしむかな」。小侍従「榊とる庭日のかげに引く琴の調べに通ふ峰の松風」。正徹「春は猶花の香さそへ玉琴の調べに通ふ嶺の松風」。琴引のはま—古今和歌六帖「何時からか調べの声の絶えにけむ琴引山の音の聞こえぬ」（前注所引歌枕名寄参照）。

29 述懐 観露園高行 内藤氏 出雲広瀬人

覚束な 身の行末の あらましも 昨日にかはる けふを思へば

【大意】（思いを語る）なんとも心細いことである。わが身の将来がこれからどうなっていくか。昨日までとがらりと変わった今日の時勢を考えると。

【注釈】述懐―心中の思いを述べる。西晋張載に述懐詩あり。大友皇子に述懐詩あり。惟宗広言に「歳暮述懐のころをよめる」の詞書あり。内藤高行―称 準太郎 出雲広瀬藩。 覺束な―(形容詞「おぼつかなし」の語幹)はつきりしないこと。また、そのため気がかりなこと。左大臣時平歌合「おぼつかな秋來るごとふぢばかまたがためにとか露の染むらむ」。身の行末の―兼輔「命あらばあらばと思ふまにみのゆくすゑを誰か知るらむ」。 あらまし―予想。予定。あらましこと。あらむが形容詞化したもの。概略の意は、中世より。山家集「待ちかねてひとりはふせどしきたへの枕ならぶるあらましぞする」。季保「過ぎにしもいまゆくすゑのあらましも心に続く明け方の空」。昨日にはるけふを思へは―隆源「うちつけに春立ち來ぬと見ゆるかな昨日にかはる今日のけしきは」。恋愛等の個人的な感慨であるかのように見せかけて、維新後の変転と将来への不安を詠んでいるのであろうか。

30 瓦斯燈がすとちゆう 桂樹園心典けいじゆえんしんてん 和多田氏わただし 出雲松江人いずもまつつゑあひと

ひら 開け行ひらく 御代のひかりとみよ あふくかなあおく 市路か、やくいちぢか 夜半の燈よはわたもしび

【大意】(ガス灯) 文明開化が進むご聖代を象徴する光として、あおぎみることだ。市街にかがやく真夜中のガス灯。

【注釈】瓦斯燈―日本で西洋式ガス灯が導入されたのは明治四年。明治七年、松江ではじめてガス燈が点火され、夜店が開かれたという(「松江市史」一九四一 九一―頁)。この時期は大通りではかなり普及していたことであろう。和多田心典―不明。ひらけゆく―正徹「百花も弥継に見ん今朝霞み年ひらけ行く色ぞこもれる」のように、本来は新年の開始を喜ぶ表現であるが、ここは文明開化を指すであろう。御代のひかりと―天皇の治世のすばらしさ。行能「春日山峰の神は常盤なるみよのひかりも月にみえつつ」。あふくかな―隆親「里わかぬうるほ四方にあふぐかな君かめぐみの春雨の空」。市路か、やく―市路は、市場に通じる道、市場が開かれる道が原義だが、広く商店の立ち並ぶ繁華街を指すであろう。万葉集「焼津辺に吾が行きしかば駿河なる阿倍の市道(いちぢ)に逢ひし子らはも」。夜半の燈―頭仲「道遠み火串の松もつきぬべし八重山越ゆる夜半の燈」。

31 蒸気車 じょうきしや 桜園三綱 さくらのみつな 北嶋氏 きたじまし 出雲杵築人 いずもきずきのひと

ゆくと来と けぶり 煙みたれて とどろ 轟くは ず ほのいかつちや くま 車ひくらむ

【大意】(蒸気機関車) 駅舎から出ていく機関車、駅舎へ入ってくる機関車、吐き出す煙がみだれ広がって、大きな音が響き渡る。雷神が車両を引いているのであろうか。

【注釈】 蒸気車—一八七二年、新橋・横浜間において鉄道開業。三綱が東京に行ったときに目撃したか。なお、蒸気自動車導入は二十世紀初頭。北嶋三綱—北島孝郷(たかのり) 称 巨人 惣太夫 前名 三綱 大社上官 今村氏二男 北島連枝を嗣ぐ 芳久門 門人多し。『出雲名所摘要』所収。ゆくと来と—実房「ゆくとくと如何なる里に急ぐらむ苅田におるるいなおほせとり」。ほのいかつちや—日本神話の火の神。古事記によれば、伊弉冉尊の体から黄泉国で生まれ、石河瀬見小河で遊んでいた玉依姫のそばに丹塗矢となつて流れ寄り、姫が拾つて床に置くと神の姿にかえり、別雷神(賀茂別雷神社)を産ませた。

32 道 みち 千家従四位 せんげじゆよゐ

人の世と ひとよ なりてそ殊に そこと ひらけ、る け 神のつくりし かみ 諸のみち もろもろ

【大意】(道) 太古神の作られたさまざまな道は、人間の時代になつて、ますます開け、盛んになつたことよ。

【注釈】 千家従四位—千家尊福。既出。人の世となりて—神代に対して、人間が国を治めるようになった時代。本来は神武天皇以降の人皇の時代をいう。古今集仮名序「ちはやぶる神世にはうたのもじもさだまらず(略)ひとの世となりて、すさのをのみことよりぞ、みそもじあまりひともしはよみける」。尊福は、神の道を広めてきた、出雲国造家としての自負を述べたと思われるが、王政復古、国家神道の展開、伊勢派との祭神論争(翌年決着)も意識しているかもしれない。伊勢大輔「人の子の親になりてぞ我が親の思ひはいとと思ひしらるる」。ひらけ、る—頓阿「吹く風もをさまれる世の恵みには花の心ぞ先づ開ける」。神のつくりし—基家「海をせき山をつくりし我が国の恋の初めも神ぞ知るらむ」。諸の道—神道及び日本古来の人としての道を指すであろうが、道路網の発達、維新後の国道整備(明治六年

より)も眼中にあるのかもしれない。諸道の訓読みならば、学芸(歌道)、文明をも指す。

【前号正誤附録】

一号正誤

五葉表四行、浮世八世上ノ誤。七葉表十行、ゑハえノ誤。全葉全行、鴨ハ鳴ノ誤。八葉表八行ゑハえノ誤。

【注釈】浮世一詩25春日閑適の第二句「豈悖浮世功名」。浮世が日本語のうきよと混同するのを嫌ったか。ゑ、鴨一歌15題知らず「夕月夜田中の松もみゑそめて鴨たつかたは露はれにけり」。見ゆはヤ行下二段活用。西行「鴨たつ沢の秋の夕暮れ」のように、歌で詠むのは鴨。字形の相似による間違い。

【奥付 日付以外前回と同じ】

明治十三年六月御届 【定価四銭】の押印あり

同年同月出版

編輯兼出版人

編	嶋根県士族	平賀半助	出雲国松江内中原町
同	同県士族	勝田千之助	同国松江南田町
同	同県士族	村上正雄	同国松江奥谷町
同	同県平民	一年舎	同国松江天神町
発兌人			

〔付記〕本稿は、

科研費基盤研究(C) 研究課題／領域番号 22K00340

近代漢詩が形成する山陰地域の文化教養環境―漢詩人と官僚・政党政治家の交遊の分析(期間二〇二二〜二〇二四年度
研究代表者 要木純一)

及び、

島根大学法文学部山陰研究センター 山陰研究共同プロジェクト 近代漢詩が形成する山陰地域の文化教養環境―漢詩人と官僚・政党政治家の交遊の分析（期間：二〇二二～二〇二四年度 研究代表者 要木純一）及び

島根大学法文学部山陰研究センター 山陰研究プロジェクト 山陰の文学・歴史関係資料の基礎的調査研究と発信・公開に関するプロジェクト（課題番号 2205 期間：二〇二二～二〇二四年度 研究代表者 田中則雄）による成果の一部である。